

## 私にとって「通じ合う」こととは何か

### 目次

1. 「通じ合う」というテーマに辿りつくまで
2. 私と「通じ合う」についての話
3. インタビューについて
  - ①「通じ合わない」とき
  - ②「以心伝心」という思い込み
  - ③自分をしっかり持つこと
  - ④自分の鎧を外すこと
  - ⑤お互いさまの関係を構築する
4. 私にとって、「通じ合う」こととは？（インタビューを終えて）
5. おわりに

## 1. 「通じ合う」というテーマに辿りつくまで

私にとって興味のあることは、無数に存在しているはずだ。昔興味を持っていたもの。例えば、映画を撮影すること。テニスをする。今興味を持っているものは、料理を作ること。中国語の歌を聴くこと。友達とおしゃべり。これから興味を持つもの。それはまだ分からないが、私は何かに興味を持ち続けていこう。このように興味自体についてはいくつでも挙げられるが、興味と自分との関係は何かと聞かれた時、そこには一つの共通点があるということを見つけた。それは、私にとって興味は他者と自分との関わりを確かめる行為であるということだ。料理に関していえば、アメリカ留学中料理をして友人に振舞うことで、ことばが思うように伝えられない分、自分のことを相手に知ってもらい、また、相手のことを知る機会を作っていたのだということが分かった。中国語の歌を聴くことは、一人で完結している興味に見える。けれど、中国語の歌を聴くと、新しいことばや考えを知ることができる。そしてそれは確実に私が次に中国語でコミュニケーションする時のベースになっている。

次に、なぜ私の興味は常に他者と自分との関わりにつながるのかという疑問が湧いた。そこで考えたのは、興味はただの入り口に過ぎず、その先に私が普段意識しない興味があるのではないかとということだ。ドンマイのメンバーからのアドバイスもあり、私の興味は「通じ合う」ことではないかと考えるようになった。

## 2. 私と「通じ合う」についての話

ドンマイのメンバーに指摘されて、「通じ合う」についての小さい頃の記憶を思い出した。それは人見知りや怒りが激しく、よく怒られていたということだ。自分が知らない人に会うと、どこか異質なものを感じて話せなくなってしまった。しかし、他者と話さずずっと聞いているだけだと、自分のことを相手が忘れてしまうのではないかとよく不安に思っていた。成長するにつれ人見知りはだいぶ治ってきたのだが、私の潜在意識の中で相手に自分の存在を認めてもらい、また認めるということは重要な位置を占めてきたように思う。私の考えでは「通じ合う」ことは、単なるメッセージのやり取りではない。たとえば、コンビニでの店員とのやり取りも、電話のセールスとのやり取りもある一定の「通じ合い」が起こっているとはいえるだろうが、深い意味での「通じ合い」は起こっていないと思う。深い意味で通じ合うというのは、他者が大切に思っていることを知ろうと試行錯誤する行為であると考えている。私はどの程度他者と深く「通じ合っている」のかということだ。私は生活の中で、無数の人とコミュニケーションを取っている。コンビニの店員から同期の仲間、友人、家族まで、私は彼らの何を知っていて、彼らは私の何を知っているだろう。普段仲が良いかと思っていたり、よく知っているかと思っている人が突然理解できない行動や言動をして驚き、傷つくことがある。それは、私が表面的なやり取りをして、「通じ合っている」

つもりになっているからだろうか。

もしかしたら、「通じ合う」ことは必要なくて、面倒くさいから表面的なやり取りで他者と接していけばいいという意見の人もいるのかもしれない。それでも、どんなに面倒くさくても、難しくても、私は他者と通じ合いたいと思っている。その気持ちはどこから来るのか、また、どうしたら他者と通じ合えるのかということインタビューやドンマイのメンバーとの話し合いで考えていきたい。

### 3. インタビューについて

実施日：2010年11月27日

対象者：中学1年生からの友人 M さん

高校は予備校が同じで、大学も同じだった。事前にクラスの内容や私が考えていることを電話やメールで伝えていた。

時間：1時間27分

M さん：友人 S：野口

#### ①「通じ合わない」とき

「通じ合う」という定義が私の中であまりはっきりしなかったので、まず、「通じ合わない」時について話すことにした。具体的には、M さんと私のコミュニケーションの失敗談について話した。

##### ・M さんの体験

友達に何を考えているのか分からないと言われたことがありショックだった。自分では意思表示をしているつもりだった。

##### ・私の体験

大学時代からの友人に、「佐美は自分の意見ばかりで、あまり人の意見を聞かないよね。」と指摘されたことがあった。それから、その友人とは疎遠になってしまった。私は一方的に通じ合っていると思っていたが、振り返ってみると、私ばかりが発言して友人は黙って合わせていたのだということが後から分かった。



自分が考えていること、思っていることは、発信しなければ、自分の中で整理されないし、相手も知ることはできない。にもかかわらず、相手もどこかで同じことを考えているという甘えや期待を持ってしまっている。そして、その思い込みが実際と違う時に「通じ合わない」という状態が生まれるのではないだろうか。

更に考えたのは、「通じ合わない」という状態に辻褄を合わせるように、

- a. 相手に合わせる
- b. 我を通す
- c. 関係を断つ

というような行動を取っていると思う。なぜ、「通じ合う」という努力をせずに、a~cの行動を取ってしまったのか。④で詳しく書きたいと思う。

## ②「以心伝心」という思い込み

①のテーマから、他者と以心伝心で「通じ合う」のは無理なのではないかという話し合いに発展した。以下会話抜粋

M: やっぱり言葉にしないとほんとに伝わらないんだなあって。すごく分かって、びっくりしたんだよね。

正確に伝えないと相手ってやっぱりいろんな妄想して、いろんなこと考えちゃうじゃん。自分もそうだし。変なこと考えて不安になったり。

S: 以心伝心なんておとぎ話だよ。いい友達は以心伝心でしてみたいな。でも、それってみんなの印象に残るくらい珍しいことだったんじゃない。道徳の教科書に載るくらい。私たち普通の人だから。以心伝心を信じちゃダメ。言葉に出して言わないと手遅れになるね。



①、②から言葉にして相手に伝えることの重要性が分かったが、では、どうしたら「通じ合う」という状態に近づけるかということで、③について考えた。

## ③自分をしっかり持つこと

相手に言葉で伝えるという、注目する点はまず他者という存在になりがちであると思う。例えば、相手にこういう表現をしたら分かりやすいのではないかとか、相手は私の言葉をどう思うかといったことである。しかし、インタビューを通して、その前の段階として自分はどう考えているのかということ意識しなくては、伝えることはできないのではないかと思った。今まで友達と話すとき、家族と話すとき、私は考えずにただ周りの雰囲気飲まれて会話してきたのではないか。常に自分の考えを意識してコミュニケーションするのは不可能かもしれないが、以心伝心を信じない→自分をしっかり持つ→相手に言葉で伝えるというプロセスが見えてきた。

## ④自分の鎧を外すこと

自分をしっかり持つ→相手に言葉で伝えると簡単に書いたが、これが簡単にいかないという話になった。そして、その理由について話し合った。以下会話抜粋。

(相手に言葉で伝えるのがどれほど難しいかを話した後で)

M: 小学校の時から、育ってきてる中で、身につけた鎧じゃないかって思うんだよ。自分を守って、守って。

S: そもそも人間がコミュニケーションするってことは、感情を伴うものだよな。喜怒哀楽のようなもの。

M の言う鎧の正体って、分かる気がする。自分が今まで得てきた情報、体験、それをみんな着てるイメージ。

M: そうそう、そんな感じ。

他人の存在なしには生きていけないから、他人に傷つけられるのが一番怖いと思う。

S: その時に、分厚い鎧を持っていたら、本当に深い話ができないよね。

苦しいけど、その鎧を一枚ずつ外していくのが、通じ合うってことかなあ??

でも、真っ裸になるのは無理で。自分で鎧をまとっているのに気づくみたいな。

自己保身に気づくっていうか。

M: ちょっとずつね、その鎧をはがしてきたつもりなんだけど、最近でも

なんか仲良くなって思うとその瞬間嫌われるのが怖くなるんだ。

そういった感情に流されるのがイヤになるっていうか、面倒くさくなる。

↓

彼女が表現した自分の鎧というのは、ビリーフのようなもので、自分の経験や知識に基づいているものだと思う。ビリーフは他者とのコミュニケーションを通して形成されるが、否定されるのも他者とのコミュニケーションを通してだと思う。これが、相手に言葉で伝えるということを難しくしている要因であるように思われる。

よって、ビリーフが傷つくくらいなら①で書いた a.相手に合わせる b.我を通す c.関係を断つという行動を選んでいたと考えた。a~c の行動を取れば、ビリーフが傷つくこともないからだ。

ビリーフが傷つく可能性があったとしても、どうして通じ合いたいと思うのか。

鎧を外すのは難しいことかもしれないが、どうしたら、鎧を外せるのかという話にもなった。

### ⑤お互いさまの関係を構築する

鎧を外すことはとても難しいので、誰とのコミュニケーションでも出来るわけではない。

そこで話し合ったのは、どのようにしたら鎧を外せるようになるかだった。以下会話抜粋。

M: 通じ合うっていう、まだどういう風に表現したらいいか分からないけど。

S: 安心感とかかな。

M: ひとついえるのは、佐美はなんかこういう行動を取るだろうなって、自信があるってい

う関係があるのが通じ合うってこと。

S：それだと以心伝心ぽくなっちゃわない??

M：別にことばとか行動じゃなくて、本質的、究極的にいえば、この人は私のこと絶対裏切らないだろうなっていう信頼がある関係。自分が許すだろうし許されるだろうっていう。

S：家族だったら比較的そういう感覚があるよね

M：他人になったら体力相当使うよね。



以心伝心を信じない→自分をしっかり持つ→相手に言葉で伝えるというプロセスを実現するには、人間関係も大切であると思う。具体的に出てきたキーワードは、「信頼関係」「許すし、許される関係」だったが、私が自分なりに考えたのは「お互いさまの関係」という言葉だ。誰でも自分の鎧を外されるのは恥ずかしいと思っているのだが、それを自分だけ恥ずかしいとか面倒だと思わないで、お互いさまで恥ずかしいのだから、まずあなたの意見を聞きますという姿勢を持ち続けることが「通じ合う」一歩だと感じた。

#### 4、私にとって、通じ合うこととは？（インタビューを終えて）

2. の部分で、「通じ合う」ことを、私は「他者が大切に思っていることを知ろうと試行錯誤する行為である」と書いたのだが、それは間違いではないにしても十分な説明ではないと思う。何をして「通じ合う」のか「通じ合わない」のか、とても主観的になってしまおうと思うのだが、改めて考え直してみる。

私にとって「通じ合う」とは、他者の存在を意識しながら、自分の考えをことばで伝え続けていく行為である。もちろん、相手である他者も同じ行為をしなければ成り立たない。そして、自分の考えをことばで伝えることは、自分のビリーフを公開することであり、相手の反応によっては傷つくこともある。よって、「通じ合う」には、人間関係も重要である。ビリーフを公開するのは恥ずかしいもので、お互いさまだという相手を受容する姿勢も必要である。お互いさまの関係を「通じ合う」ことで、更に深い信頼関係に発展させることもできる。反対に「通じ合わない」とは、自分の考えをことばで伝えることを止めてしまおうことをいう。

「通じ合う」と「通じ合わない」の大きな違いは、未来に続いていく行為か否かであると考えている。諦めずに、自分の考えを伝え続けていけば、相手からプラスであれ、マイナスであれ、何らかのフィードバックを得ることができる。そして、それは未来の私へといつかは必ず繋がっていく。一方、「通じ合わない」という行動を選択したとすると、そこでコミュニケーションはストップしてしまう。自分のビリーフが傷つくことはなくなるかもしれないが、それ以上の変化は望めなくなってしまうのだ。それが、私が冒頭のレポートで書いた「どんなに面倒くさくても、難しくても、私は他者と通じ合いたいと思っている。

その気持ちはどこから来るのか」という問いに対する答えである。

## 5. おわりに

このレポートを書いて良かったことは、日常に潜んでいる私の問題意識について考えることができたということだ。常々何かに対して漠然と疑問を感じているのに、いつも自分の頭の中で完結してしまっていた。「通じ合う」ということはおそらく無意識ではとても小さい頃から関心のあったことだが、ドンマイのメンバーやインタビューを通して、他者からのフィードバックをもらい、意識化して自分なりの考えをまとめることができた。そして、今回導き出した考えは、この授業だけに留まらず私の生活や価値観など、わたしの全てに繋がっていくものである。

ドンマイのメンバーは偶然割り当てられたもので、お互いのことをほとんど知らなかった。最初はあまり話し合いが進まなかったが、お互い真剣に自分たちの問題意識を話し合うことで、お互いさまの関係→自分の考えをしっかりと持つ→自分の殻を外すというプロセスが起こったように思う。それは、まさに「通じ合う」という行為であり、ドンマイのメンバーもレポートで指摘していたように、無意識に「実践」もしていたのだということが分かった。

そして、ドンマイのメンバーは意見を聞くだけでなく、率直に意見も言ってくれるので、普段では話さないような深い対話ができることを大変うれしく思う。

「ことばの市民」というキーワードは、はっきりいって最初は全く意味が分からなかった。しかし、クラスの参加を通して、自分の想像にすぎないが、今では「ことばの市民」についてのイメージが浮かぶようになった。それは、自分自身のことばで「通じ合う」という活動をしていくことではないかと思う。ここでいう、ことばとは、私たちがおこなったような対話活動をさし、自分の考えをことばで発信し、他者のフィードバックを受けるということを繰り返していくことではないだろうか。「市民」というのは、自分以外の他者の存在を示唆している。市民になるためには、その市民になるためのルールが必要だと思う。それは、自分の考えを絶対化したり、他者の考えを否定したりするのではなく、その多様性を受け入れた上で、自分たちができることをしていくことではないかと思う。

このように考えると、「ことばの市民になる」ことはとても人間らしい行為だと思えてきた。多分、他の動物たちは何か食い違いが起こった時、例えば、次のボスザルを誰にするのか？という時、けんかをして、どちらが強いかを決めることで以外、解決の道はないだろう（おそらく）。けれど、人間だったら、ことばを使って話し合って、「今期は二人のボスでやっていきましょう」なんていうこともできる。残念ながら、人間は、戦争や支配など前者の形で他者と関わることも多いが、私は後者の人間らしい形でこれからも他者と関わっていくことを望んでいる。